

各関係機関の長 殿

福岡県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について(送付)

このことについて、病虫害発生予報第4号(7月)を発表したので送付します。

平成14年度病虫害発生予報第4号(7月)
主要病虫害の発生現況及び予報の概要

【普通作物】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
早期水稲	いもち病(穂いもち) 紋枯病	- 並	少ない 並
普通期水稲	いもち病(葉いもち) 萎縮病 ツマグロヨコバイ 縞葉枯病 ヒメトビウンカ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	少ない - 並 - 並 少ない - -	少ない やや少ない 並 やや多い 並 やや少ない やや少ない 並

【普通作物 - 早期水稲】

1 いもち病(穂いもち)

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、葉いもちの発病は認められなかった(平年の発病株率：1.8%、前年：0.8%)。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年並か高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今年の出穂期は平年より6日程度早くなる(詳細は平成14年6月20日発表の福岡県米麦大豆生産改善速報第4号を参照)と予想されており、穂いもちの防除適期(出穂期直前)を失しないようにする。特に、

粒剤を施用する場合には早目に行う。

イ 防除薬剤については「平成14年度普通作物病害虫防除基準」を参照する（以下の病害虫についても同様）。

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病株率は0.1%（平年：0.3%、前年：0.9%）、発生ほ場率は7.7%（平年：9.0%、前年：18.8%）であった。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年並か高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今年の出穂期は平年より6日程度早くなる（詳細は平成14年6月20日発表の福岡県米麦大豆生産改善速報第4号を参照）と予想されており、防除適期（出穂期）を失しないようにする。

イ 出穂以降は気温が高くなるとともに上位葉への進展が増加する。またイネの耐病性も弱くなるため、適期に防除を行う。

【普通作物 - 普通期水稻】

1 いもち病（葉いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、葉いもちの発病株率は0.04%（前8か年平均：1.1%、前年：0.9%）、発生ほ場率は3.7%（前8か年平均：6.3%、前年：2.9%）と少なかった。

イ 気象予報では7月の平均気温は平年並か高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 補植用の置き苗は早急に除去する。

イ 葉いもちに対する薬剤防除の効果は発生初期ほど高いので、防除時期に注意する。

2 萎縮病（ツマグロヨコバイ）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、早期水稻では発病は認められなかった（平年の発病株率：0.2%、前年：0.1%）。

イ 普通期水稻でのツマグロヨコバイの10株当たり成幼虫数は平均0.6頭（平年：0.2頭、前年：0.1頭）、発生ほ場率は19.2%（平年：10.6%、前年：5.9%）であった。

ウ エライザ法による検定の結果、イネ萎縮ウイルス保毒虫率は平均0.1%（平年：0.8%、前年：0%）であった。

(3) 防除上注意すべき事項

本病を対象とした防除の必要はない。

3 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、早期水稲での発病株率0.6%（平年：0.1%、前年：0.1%）、発生ほ場率15.4%（平年：1.7%、前年：6.3%）であった。

イ 普通期水稲でのヒメトビウンカの10株当たり成幼虫数は平均0.7頭（平年：0.1頭、前年：0.2頭）、発生ほ場率は7.7%（平年：7.3%、前年：11.8%）であった。

ウ エライザ法による検定の結果、イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は平均1.2%（平年：0.4%、前年：0.7%）であった。

（3）防除上注意すべき事項

箱施薬を実施していないほ場で、本虫の発生が多い場合は防除を行う。

4 セジロウンカ

（1）予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年、前年よりやや少ない

（2）予報の根拠

ア 行橋市の予察灯で平年より約一か月早い5月15日に初飛来を認め（平年：6月16日、前年：6月7日）、その後各地の予察灯及びネットトラップで6月11日、24日、25日に飛来を確認した。

イ 6月5半旬調査の結果、本田での成幼虫数は平年より少なかった。

ウ 気象予報では7月の平均気温は平年並か高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となる。

（3）防除上注意すべき事項

今後の飛来状況に注意し、発生予察情報、ホームページの飛来状況及びテレホンサービスを参照する。

5 トビイロウンカ

（1）予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年、前年よりやや少ない

（2）予報の根拠

ア 県内各地の予察灯及びネットトラップでは飛来を確認していない。

イ 6月5半旬調査の結果、本田での発生は確認していない。

ウ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となる。

（3）防除上注意すべき事項

今後の飛来状況に注意し、発生予察情報、ホームページの飛来状況及びテレホンサービスを参照する。

6 コブノメイガ

（1）予報の内容

ア 発生時期：平年・前年並

イ 発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、普通期水稲での発生は確認していないが、早期水稲では食害株が認められた。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となる。

(3) 防除上注意すべき事項

今後の飛来状況に注意し、発生予察情報及びテレホンサービスを参照する。

【果 樹】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
カンキツ	黒点病 ミカンハダニ	並 やや多い	並 やや多い
ナシ	ナシヒメシンクイ ハダニ類	並 並	並 並
ブドウ	べと病	並	並
カキ	炭疽病 うどんこ病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少ない 並 やや多い やや多い	やや少ない 並 やや多い やや多い
イチジク	アザミウマ類	並	並
ナシ、カキ	カメムシ類	多い	多い

【果 樹】

1 カンキツの黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、発病果率は0.3% (平年：0.2%、前年：0%)、発生ほ場率は15.0% (平年：7.2%、前年：0%)であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源の枯れ枝を極力除去する。

イ 降雨が続くと多発するので、積算降水量250mm毎に薬剤散布を行う。

2 カンキツのミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では寄生葉率は平均32.0% (平年：13.6%、前年：17.3%)、発生ほ場率は65.0% (平年：49.1%、前年：68.4%)であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨明け後、高温乾燥が続くと急激に増加する場合がありますので、発生状況に注意し、雌成虫の寄生葉率が30～40%を目安に防除を行う。

イ 防除にあたっては、葉裏にも十分薬液がかかるように丁寧に散布する。

ウ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

3 ナシのナシヒメシンクイ

(1) 予報の内容

発生時期：平年・前年よりやや早い

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップによる第1世代成虫の発蛾最盛期は、平坦地域で5月6半旬、山間地域で6月1～2半旬頃であり、平年並であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第2世代成虫の発蛾最盛期は平坦地域で6月6半旬、山間地域で7月1～2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、発蛾最盛期に7～10日間隔で2～3回防除する。

イ 幼虫は主として果頂部から果実に食入加害するので、防除に当たっては、果実に十分薬液がかかるように散布する。

ウ 交信攪乱剤を施用する場合は、傾斜地ほ場や小面積では効果が低下するので注意する。

4 ナシのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並で、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査の結果、寄生葉率は平均1.7%（平年：1.9%、前年：5.3%）、発生ほ場率は53.3%（平年：25.5%、前年：43.8%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 各種薬剤に対する感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

5 ブドウのべと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査の結果、発生葉率は平均0.8%（平年：0.4%、前年：0.05%）、発生ほ場率は21.4%（平年：12.7%、前年：7.1%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期に低温で雨が多いと多発しやすく、発病後の防除効果は劣るため、予防散布を徹底する。

イ 罹病葉は感染源となるので極力除去する。

6 カキの炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、発病枝率は平均0.2%（平年：1.3%、前年：0.9%）、発生ほ場率は平均17.6%（平年：28.2%、前年：43.8%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 樹冠内部の徒長枝に感染し、発病しやすいので、防除にあたっては薬液が樹冠内部にも十分かかるように丁寧に散布する。

イ 罹病枝及び罹病果は、感染源になるので極力除去する。

7 カキのフジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では寄生果率は平均8.8%（平年：4.0%、前年：3.9%）、発生ほ場率は平均70.6%（平年：36.4%、前年：62.5%）であった。

イ 気象予報では、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月中下旬の適期防除を失したほ場では、早急に防除を行う。

イ 本虫は、ヘタの下や葉と重なった果実の表面などの薬剤がかかり難い箇所によく寄生しているので、十分な薬量を使って散布むらのないよう

に防除する。

8 ナシ、カキ、カンキツ等のカメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 筑紫野市吉木の予察灯・集合フェロモントラップにおける4月1半旬～6月5半旬までのカメムシ類の累計誘殺数は、下表のとおり前年より著しく多い。

イ 6月5半旬のナシの調査では、被害果率は平均0.4%（平年：0.1%、前年：0%）で、やや被害が多く発生している。

ウ 6月5半旬のヒノキ球果のピーティング調査では、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシの寄生頭数は、1地点当たり2.1頭（平年0.4頭）と多かった。

エ 県内13カ所の6月下旬のヒノキ球果における1果当たり口針鞘数は、平均で0.2本、被害球果率も9.5%であった。これは、調査を開始した6年間では最も多い。

オ 気象予報では、7月の気温は平年並が高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、樹種によって使用できる薬剤が異なるので注意する。

イ 今年は、ヒノキ球果の結実量が県全体では並であるため、越冬成虫の一部は7月から果樹園へ飛来するおそれがある。また、地域によりヒノ

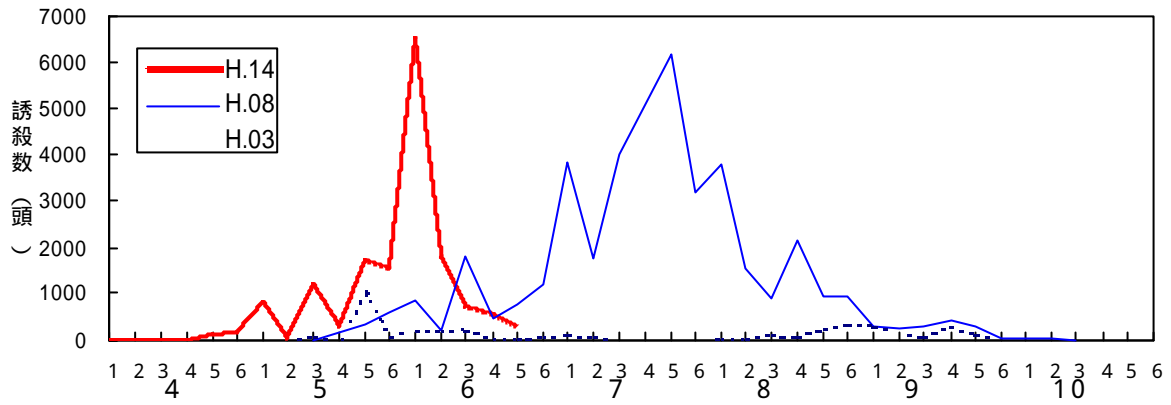
キ球果の結実量に差があるため、飛来時期が異なることが予想される。
 果樹園内をよく見回り、発生状況に応じて防除を行う。
 ウ 今年は早くからヒノキ球果への加害が始まっており、7月下旬以降の
 カメムシの動向には特に注意する。

予察灯及び集合フェロモンによるカメムシ類の誘殺虫数（筑紫野市吉木）

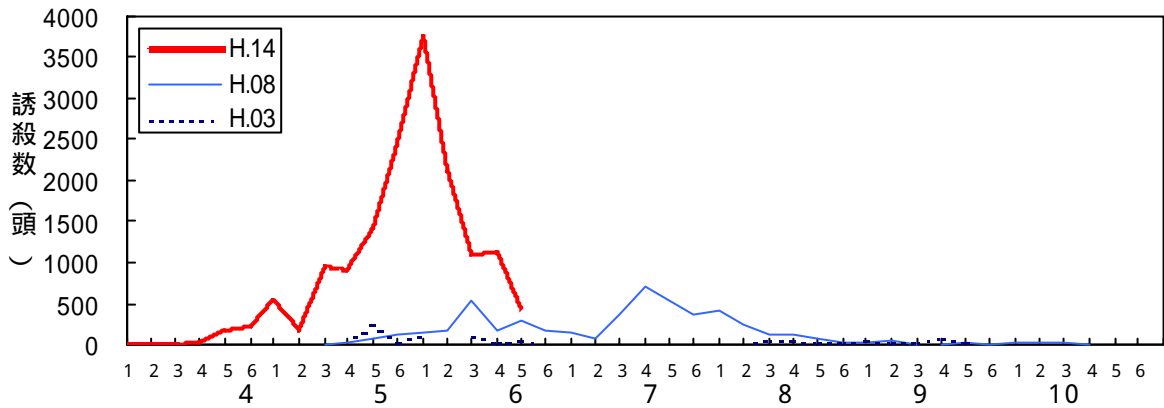
調査時期	チャバネアオカメムシ		ツヤアオカメムシ		クサギカメムシ	
	予察灯	集合フェロモントラップ	予察灯	集合フェロモントラップ	予察灯	集合フェロモントラップ
4月1半旬	0(0)	5(0)頭	0(0)	0(0)頭	0(0)	1(0)頭
2	2(0)	16(0)	3(0)	0(0)	0(0)	0(0)
3	0(0)	11(0)	7(0)	0(0)	0(0)	0(0)
4	6(0)	1(0)	15(0)	0(0)	0(0)	0(0)
5	115(0)	465(3)	174(0)	3(0)	3(0)	0(0)
6	156(0)	145(2)	215(0)	28(0)	5(0)	5(0)
5月1半旬	792(0)	869(8)	535(0)	53(0)	8(0)	10(0)
2	51(1)	29(31)	159(0)	3(1)	0(0)	1(0)
3	1,209(0)	925(10)	951(0)	196(0)	5(0)	16(0)
4	279(1)	356(9)	910(2)	213(0)	0(0)	6(0)
5	1,709(10)	2,593(11)	1,419(8)	1,338(4)	2(0)	22(0)
6	1,528(5)	2,669(21)	2,433(4)	901(5)	6(0)	15(2)
6月1半旬	6,507(2)	11,141(6)	3,754(2)	3,458(0)	45(0)	68(0)
2	1,820(6)	2,511(16)	2,103(5)	414(0)	28(0)	30(0)
3	728(11)	1,104(12)	1,091(2)	181(1)	37(1)	17(0)
4	544(6)	1,477(17)	1,112(2)	157(0)	60(0)	21(0)
5	288(4)	208(1)	417(1)	36(0)	43(0)	11(0)
合計	15,634(46)	24,525(148)	15,298(46)	6,981(11)	242(2)	223(2)

注1) 予察灯：20Wブラックライト

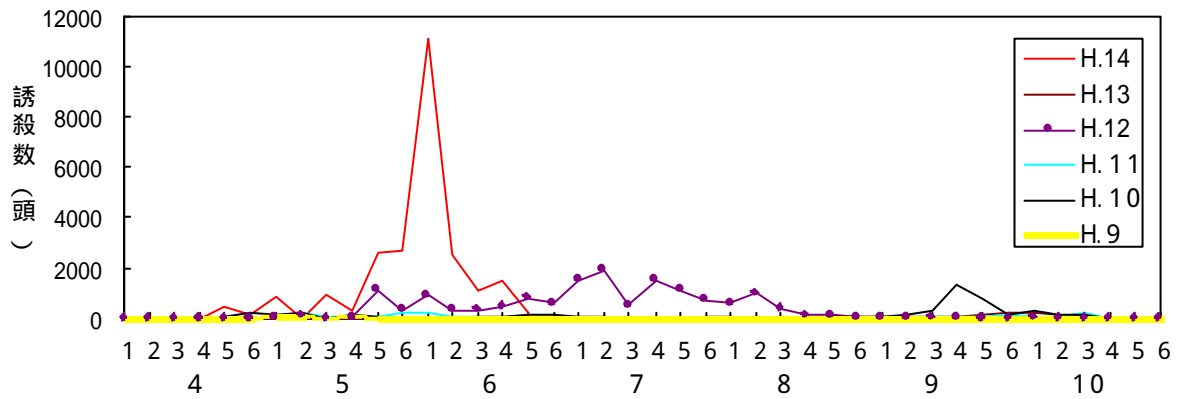
注2) ()は前年の誘殺虫数



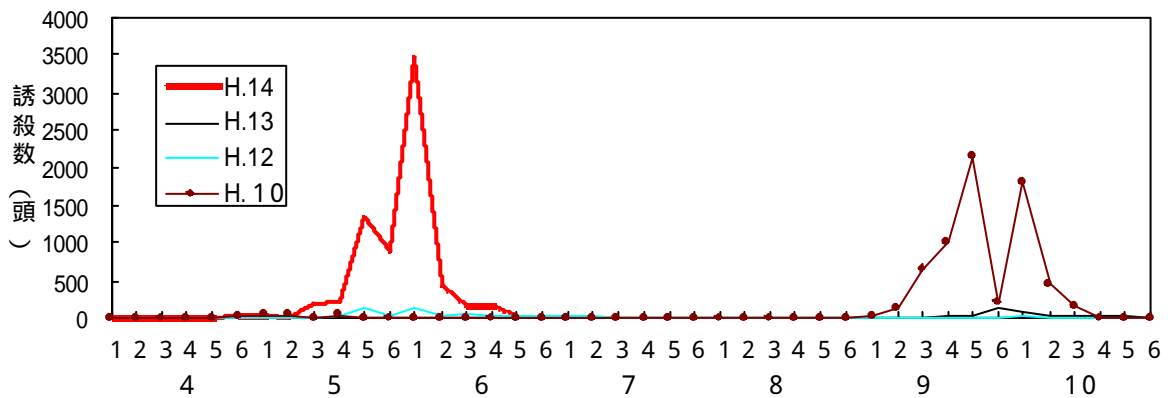
予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



予察灯によるツヤアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



集合フェロモンによるチャバネアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)



集合フェロモンによるツヤアオカメムシの誘殺虫数 (筑紫野市)

【茶】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
茶	炭疽病	やや少ない	並
	輪斑病	並	並
	チャノコカクモンハマキ	やや少ない	並
	カンザワハダニ	やや多い	やや多い
	チャノホソガ	やや少ない	並
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多い	やや多い
	チャノキイロアザミウマ	やや多い	やや多い

平年値（過去10年間の平均）がない場合は、前年までの平均値を用いた。

【茶】

1 輪斑病

(1) 予報の内容

発生量 : 平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、病葉は認められなかった（1㎡当たり病葉数
平年：0.03葉、前年：0葉）。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉や茎の傷口から病原菌が感染するため、三番茶摘採または刈り落としの当日あるいは翌日に薬剤防除を実施する。

イ 輪斑病の発生園では、新梢枯死症も発生しやすいので注意する。

ウ 防除薬剤は「平成14年度茶・いぐさ病虫害防除基準」を参照する。
農薬安全使用基準を守り、危被害防止に努める（この項は以下の病虫害
虫についても同様）。

2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多く、前年より多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬の調査では、寄生葉率は平均7.2%（平年：5.2%、
前年：2.3%）であった。50葉当たり虫数は平均25.5頭（平年
：10.7頭、前年：2.8頭）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生のみられない茶園もあるので発生状況を調べ、寄生葉率が2%以上である場合は防除を行う。

イ 各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用しない。

3 チャノホソガ

(1) 予報の内容

ア 発生時期：平年・前年よりやや早い

イ 発生量：平年並で、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 黒木町（八女分場調査）のフェロモントラップによる6月5半旬までの累計誘殺数は、725頭（前6カ年平均：870頭、前年：1,324頭）で、第1世代成虫の発生はやや少なかった。

イ 6月5半旬の調査では、1㎡当り巻葉数は平均0.3葉（平年：1.2葉、前年：2.3葉）であった。

ウ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見え始めたら直ちに防除を行う。

イ 第2世代成虫の発蛾最盛期は、黒木町で7月1～2半旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し発蛾最盛期の7日後に防除を行う。

4 チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均1.1頭（平年：0.4頭、前年：0.3頭）の発生であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

発生のみられない茶園もあるので発生状況を調べ、萌芽期にたたき落とし法（A4版白紙上）で4頭以上発生している場合は防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬のたたき落とし法による調査では、平均9.6頭（平年：4.4頭、前年：4.1頭）、発生ほ場率は、92.0%（前年：90.5%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ほとんどの茶園で発生しているので、たたき落とし法（A4版白紙上）で発生量を調べ、10頭以上発生している場合は防除を行う。

【野 菜】

作物名	病虫害名	発生現況 (平年比)	発生予想 (平年比)
イチゴ (育苗床)	うどんこ病 炭疽病	やや少ない やや多い	やや少ない やや多い
アスパラガス	斑点病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 ヨトウ・タバコガ類	やや少ない 並 並 やや少ない やや少ない	やや少ない 並 並 並 並
ネギ	シロイチモジヨトウ *	やや多い	並
野菜共通	ハスモンヨトウ *	多い	多い

- ・ * はフェロモントラップによる誘殺虫数である。
- ・ アスパラガスは、前々年より調査のため、前年値との比較である。

1 イチゴのうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均13.5%（前9か年平均：48.7%、前年：21.4%）であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ぼでの発病は発病（保菌）苗の持込みによるので、育苗期の防除を徹底して、健全苗の確保に努める。

イ 上位葉への感染を防ぐとともに、薬剤の付着をよくするため可能な限り下葉を除去する。

ウ 本病原菌の各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだローテーション散布を行う。

2 イチゴの炭疽病

（*Colletotrichum acutatum* 菌による葉枯れ炭疽及び *Glomerella cingulata* 菌による炭疽病）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、子株での発病株率は平均1.3%（前9か年平均：0.3%、前年：0%）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

平成14年5月30日付、病虫害発生予察注意報第4号を参照のこと。

3 アスパラガスの斑点病

(1) 予報の内容

発生量：前々年より少なく、前年よりやや少ない

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、発病株率は平均0.6%（前々年：59.2%、前年：4.4%）であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 過繁茂になると多発するので、整枝を的確に行いほ場内の通風をよくする。

イ 発病部位はできる限り取り除き、薬剤による防除を徹底する。

4 アスパラガスのアザミウマ類

(1) 予報の内容

発生量：前々年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 6月5半旬調査の結果、寄生株率は平均27.2%（前々年：26.7%、前年：61.1%）であった。一部のほ場では多発している。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

5 ネギのシロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年、前年並

(2) 予報の根拠

ア 朝倉町長洲のフェロモントラップによる誘殺虫数は、5月5半旬～6月2半旬で139頭（平年：48頭、前年：60頭）、6月2半旬～5半旬で92頭（平年：48頭、前年：57頭）であった。

イ 気象予報では、7月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

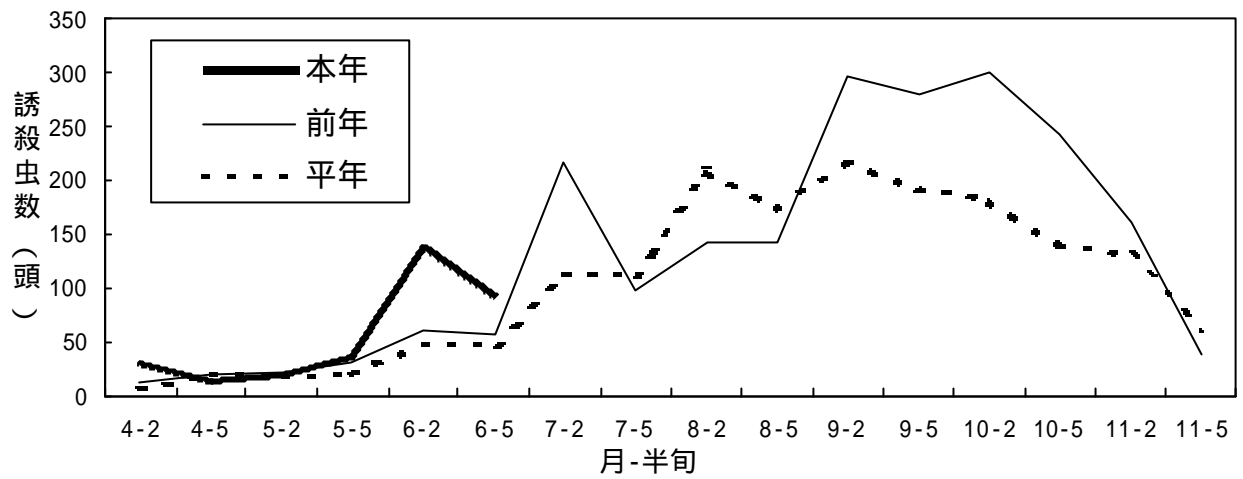
ア 今年は、誘殺虫数が平年より多く発生時期も早く、今後の発生動向に注意が必要である。

イ 中齢以降の幼虫に対しては薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、薬剤防除は孵化直後の幼虫をねらって行う。

ウ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。

エ 葉身に産みつけられた卵塊から孵化した幼虫はそのまま葉身内に食入し、内部から食害するため、卵塊や初期の被害葉は見つけ次第直ちに除去する。

オ 各種薬剤に対する感受性が低下するのを避けるため、同一系統薬剤を連続して使用せず、数系統の薬剤を組み込んだロ・テ・ション散布を行う。



フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの誘殺数の推移 (朝倉町長淵)

6 野菜共通のハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より多い

(2) 予報の根拠及び防除上注意すべき事項

平成14年6月28日付、病害虫発生予察速報第5号を参照のこと。

6月の気象予報（1か月）

（予報期間 6月29日～7月28日）

2002年6月28日
福岡管区気象台発表

【概要】

向こう1か月の平均気温は平年並か高く、降水量は平年並、日照時間は平年並の可能性が大きいでしょう。

【要素別確率】

（単位％）

要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気温	20	40	40
降水量	20	50	30
日照時間	30	50	20

- < 1週目の予報 > 6月29日～7月5日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。
- < 2週目の予報 > 7月6日～7月12日
この期間の平均気温は、高い可能性が大きいでしょう。
- < 3～4週目の予報 > 7月13日～7月26日
この期間の平均気温は、平年並の可能性が大きいでしょう。

参考資料

福岡における平年値

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間と1週目、2週目、3～4週目の平均気温

向こう1か月			平均気温（ ）		
平均気温（ ）	降水量(mm)	日照時間(h)	1週目	2週目	3-4週目
26.6	278.2	168.5	25.0	26.2	27.4

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除について、ホームページとテレホンサービスでお知らせしています。アドレス及び番号は下記の通りです。

ホームページアドレス

www.jppn.ne.jp/fukuoka

電子メールアドレス

kfok0301@sp.jppn.ne.jp

テレホンサービス

092-928-6401（普通作・イグサ）

092-928-6402（果樹）

092-928-6403（野菜・茶）